

知里幸恵のユーカラ

萩中美枝

大正十二年『アイヌ神謡集』⁽¹⁾が出版された。著者知里幸恵は、この一冊を残して十九歳で逝ったアイヌである。幸恵に著作をすすめたのは金田一京助で「思ふがままに書いて下さい」「御言葉ハ、

「タ御もつともです。たゞし（中略）なまなか私の筆などで直さない法が後世までいい参考資料をのこす事になるのです」「ちつとも臆せず、祖先を信じ、且愛してそのまゝを」書くようと、たびたび励ましの手紙を送り、礎稿のノートの余白にも次のような書き込みが随處に見られる。⁽²⁾

「ainuのittutuyeyを、日本語で何といふのか、私はいくら考へても思ひ付けませんので、そのままにしておきました」「御尤デス、⁽³⁾ 紛るト申シマス」

「ウリリは鳥の名ださうですが、日本語で何といふか誰も知りません。バチラニシペのアイヌ語辞典でも見たらわかる事と思ひます」「鶲トアリマス。ウガラス、トモアリマス。鳥ニ似テ黒ク、水クダツテ魚トル鳥デセウ」

「ウライ、魚とる仕掛け」「築ヤナ」

まだアイヌに関する知識の極く低かつたこの時代に、十代のアイヌの女の著作を世に出そうとした金田一京助の労と、その姿勢が推測できる。

幸恵は大正十一年九月、著作をまとめるため、四ヶ月前から寄宿していた金田一宅で急逝したが、京助は「本当に互いに心から理解し合つて入神の交わりをしました」などと記すので「神謡集」には彼の手が入っているという憶測もされた。

しかし前述したように、彼の幸恵ノートに対する態度は慎重で、大切に扱っている。彼のおびただしい著作と対比してみても、幸恵のローマ字の配置や表記法、訳のつけ方などにも明らかな違いが見られる。「神謡集」は、本文だけでなく、注にもアイヌの生活習慣を示す重要な記載があり、いまも、すぐれた文献として通用する。北海道大学文学部言語学研究室から『『アイヌ神謡集』辞典』も出版され、残されたノートや、手紙・日記なども公けにされ、幸恵の伝記もまとめられ、中学の教科書にも紹介されている。

これらに触れた人たちは、一様に幸恵の名文に驚かされる。「神

謡集」の冒頭の「銀のしづく降る降るまわりに」というユーカラを例にとつてみる。このアイヌ語は sirokani (銀) -pe (合成語) 中にあらわれる水の意) ran (～が下へ) piskan (～のあたり、～のまわり) である。幸恵も稿では「あたりに降る降る銀の水」となっている。「銀の水」を「銀のしづく」と訳すようになった幸恵の文学性。だが、その彼女の才が、むしろ語る文学であるユーカラに微妙な影を落してはいまいか。

昭和六年、金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカラの研究^(a)』によつて、はじめてアイヌの口承文芸ユーカラ yukar の全容が明らかになつた。とくにこの中に収められたワカルパ伝承の人間のユーカラ [kutune-shirka] の原文の巧みな言いまわしは、文字通りアトムティタク atomte-itak (飾られた言葉) でつづられていて、この書がユーカラ研究の先達となつた。幸恵のユーカラを考えると見のがすことはできない。あとで記すが、ここには、幸恵のように文字を意識しない「語り」の息遣いが伝わつてくるからである。

神々のユーカラについて

『アイヌ神謡集』にはローマ字のアイヌ語による十三篇のユーカラと、その対訳が収められてゐる。これらはすべて「神々のユーカラ」である。神々のユーカラは、ふつう女が伝承する。幸恵ノートに「フチがよく歌つて聞かせてくれます」とあるフチ huci (おば

あさま) とは母方の祖母金成モナシノウクのことである。幸恵は六歳のとき旭川の聖公会伝道所で布教活動をしていた伯母金成まつに預けられ、上京するまでほとんどの地で過^(b)したが、そこにモナシノウクが同居していた。

弟の真志保が「私は父母がアイヌ語を使うのを殆ど聞いたことが無かつた。だから祖母と共に旭川市の近文コタンで人と為つた亡姉幸恵は別^(c)だと言つてゐる通り、幸恵は自然にモナシノウクのアイヌ語を身につけたのだろう。

神々のユーカラの多くはメロディに乗せて歌うように語られる。釧路地方などではマツユーカラ mat-yukar (女のユーカラ) と呼んで女が伝承すべきものとする。「やれしく歌うものだから」と、釧路出身の八重九郎が言つていたが、幸恵の神々のユーカラも「人間のユーカラ」とは比較にならないほどユーカラの特徴をとらえている。

ただ、気になるのは折返し^(d)の位置を示していないことである。普通は折返しを一小節毎にはさみながら語り進むが、言葉を畳み込むようになり散文調にするときは折返しを省くこともまれではない。また二度続けることもある。聞いていると違和感は全くない。むしろ、そのことによって聞き手の気持を昂揚させる。書かれたものでも、折返しの位置が示されていれば、語り口調の変化などが想像できるのだが、幸恵の折返しは冒頭に置いただけである。あとは省略してしまい、「え」と、どうついているのかわからない。

人間のユーカラについて

沙流や胆振では人間のユーカラをユカラ（ユーカラ）yūkar といふが、地方によって呼び方が違う。⁽¹⁰⁾ 鈎路ではサコロベ sa-kor-pe で、ふしを持つものという意の通り、語り手それぞれが自分のふしに乗せて語る。だが八重九郎によれば、⁽¹¹⁾ ゆしより語りを聞かせるもので、男が伝承することになっているといふ。

旭川でも男が語るべきものとされていたが、モナシノウクに触発されて女も語るようになり、その先鋒は母川村ムイサシマツだつたと砂沢クラも言っていた。

幸恵ノートには人間のユーカラが二篇残されている。このうちの一篇は「SHUPNE SHIRKA」の別伝として金田一がとりあげた。⁽¹²⁾ この書の例題に「平村コタンピラが私方へ客となつて、」の『蘆丸の曲』を堂々と演じた。終つた時に、それまでじつと聞いて居た知里幸恵さんが、私の幌別方言とは少し違いますが、それでも、すつかりわかりました、と言つて書き出したのが蘆丸の別伝である。『蘆丸の曲』を公表するにあたつて同時にこれを公表してその方に記酬いる。とあるが、幸恵ノートには金田一によつて次のように記されている。

Shpne-shirika 平村コタンピラ口述 大正十一年七月森川町金田一宅に於テアイヌ同勢七人ト共ニ同座シテ。金田一速記ニモトヅキ知里幸恵一週間ホドカ、リテ筆録ス。但シ実演ナル故耳

クシテ金田一ノ筆記ハ片仮名ニテ語頭グラヰゞゝカキツケエタル全然不完全ナモノ。幸恵ハ一度キヽテスツカリ知悉シ、金田一ノ手記ヲ座右ニオキテ思ヒ出シツ、完全ニ全部ヲコヽニ再記ス。と。したがつて、このユーカラの筆録は二人の共同作業によるものといえるだろう。もう一篇は、幸恵が題名としてあげた「Omanpesh un mat」で、言い換えれば、幸恵自身の筆による人間のユーカラはこれ一篇である。ノートにはローマ字のアイヌ語文のテキストだけ日本語訳はない。一度、カナ表記に改められたものが紹介されたが、『知里幸恵ノート』に全文を収め、私が日本訳をつけた。⁽¹³⁾ それをもとにして考えてみる。

幸恵の出身地幌別（いまの登別市）では、日高の沙流と同じように、人間のユーカラの主人公はシヌタッカに住んでいる。ユーカラに題名はなく、便宜上ポンシヌタアカウンクルヤイエユカラpon-sinutapka yay-e-yukar（若ハシヌタアカに住むひとが自らを物語る）ということが多い。幸恵が題名としたomanpesh-un-mat（オマンペシにいる女）は、彼女が主人公になつて語つているのではなく、ヒーローのためにはたらく美女で、ヒーローはボイヤウンペといふ砕けた言い方もあるがポンシヌタアカウンクルである。ポンシヌタアカウンクルは、ときには荒々しい行動をする。「わが打ち見るに 美しい少女は 白き眼珠の末を むき出しにし 眼球の上 赤き血の筋 縦横に交叉したる その全く死ねたる骸をば浜の沙洲の上へ 我打ち棄つ」と、抱きかかえていた少女が死んだと見るとポイと棄ててしまつたりして、

otu-si-kira ne やたつの狂おしい氣持になり
ore-si-kira ne みつの本當の狂気が

i-ko-hetari 私におらむらん起つた

などと謳われるよう氣性の激しいところがある。だが幸恵のユー

カラのヒーローは、あまり分別のないことはしない。

戦つてゐるのに、胸を突き刺されたりして吐瀉物が鼻口からほとばしる様子を謳う慣用句がある。

siunu omke にがくて激しい咳に

ko-tasum-nitom むせかえり

e-sitayki かいと吐あひける

etuhi kus-pe 鼻を通るものは

numne turse 大粒（の座）がいぼれ落ちるよべ

poroho kus-pe 口から吐き出ぬものは

para-tepa ne 広幅の下帯のように

アイヌの男は赤いtepa（褲）をつけることが多いので、血液まじりの赤い吐瀉物が口幅ひつけられ出す様子をあらわしたもので、敵のAのときもBの場合も、自分も、同じような言葉を使つて語るのが普通である。幸恵も一度は慣用句を使うが、あとは、

shiumonke にがく激しい咳に

kotashnitonkur むせかえつて

eshitaiki かと吐きつけた

shirkichiki ありあまだから

……ム、因句を省いて次の動作に移つてゐる。

ユーカラ、とくに人間のユーカラのように長篇ものには同じ句反復が多い。わかりきつていふことでも明確に叙述する。文字化すると冗漫だと思われる」とも、じかに聞くと、一定の既知の語の巧みな組合せが物語りをより神秘的にさせ、聞き手に、もうその句が現われるころだという期待感を持たせたりもする。読めば目を覆いたくなるような戦闘の場面も、聞き手の男たちが勇壮なヘツチエhetce（印の手）を入れて語り手を助け、場を盛り上げる。だが、幸恵のユーカラはそこまで語らない。書けない、というべきかもしれない。「Erum yaveyukar」（ネズミが自分の）とを語る）の中に

「うんちをして おしつけをした」という言葉があるのを、幸恵は次のように考へてゐる。

「んなやうな何といひませう、野卑でせうか。なんだか、キタナイやうな事を言つたものはたく山ありますけれども私は何だか知ら氣おくれがして、こんな事を書くのが嫌なので御座います。で、なるべくさういうふキタナイやうな事を書かないやうにしたのですがれども、ひうも、そんないい事ばかりなのが少ないだけ……」

ネズミの話は、語頭にin-を置いて韻をふんだ、ひびきのよい十行の詩からなつてゐる。それをいかに早く間違なく言うかを競う早口言葉で、子供たちもあそぶ邪気のないものなのだが。

幸恵は死の四日前、両親あてて手紙を出している。それには、結婚不可の診断を下されて「つぶれる様な苦涙の湧くのを何うする事

も出来なかつた」胸の内を訴えたあと「ほんとうに懺悔します。そして、其の涙のうちから神の大きな愛をみとめました。そして私はしか出来ないある大きな使命をあたへられてる事を痛切に感じました。それは、愛する同胞が過去幾千年の間に残しつたへた、文芸を書残すこと⁽¹⁹⁾だと伝えた。「久方振りで聖書を見て私は喜ぶ。やはり私は神の子」などと日記にも記し、折にふれて聖書も書き写す幸恵は、最後までキリスト教徒であった。

『アイヌ神譜集』の序には「冬の陸には林野をおほぶ深雪を蹴つて、天地を凍らす寒氣を物ともせず山又山をふみ越えて熊を狩り、夏の海には涼風泳ぐみどりの波……」と「大自然に抱擁されて」生活していた昔を偲んだあとに「時は絶えず流れる、世は限りなく進展してゆく。激しい競争場裡に敗残の醜をさらしてゐる今の私たち」に思いを走らせている。本文の礎稿が多いのに、この序の下書きがないのはなぜだろうと、たびたび関係者たちの間で話題になつていた。

最近になつて、幸恵の残した横八縦十三センチメートルほどの小さな手帳の中に、次のようなメモが見付かつた。

自分を顧る時あまりに自分が醜いのでつひ／＼何うしても過去幾千年の昔を偲び追憶しては涙ぐみ神は何故……

孤独の感じはひし／＼とせまつて涙なしには居られないのです歴史を顧みる時國は滅びまた興へり、またほろびる 神は何故に敗残の何處まで苦しめ給ふのでせうか！

世を呪 神をうらみ 多く わざかに 大民族がわづか一万六十の小数になつて北海の島のところぐに存在しているのですいゝじやないの、貴女がそれだけ勉強してゐるのだもの、誰だつて貴女をアイヌだなんて思ひやしないわ何を悲観しているのさ』ポンと背を叩いては貴女が慰めて下さいました。然し、貴女はまだ私の心持がおわかりにならなかつたのです。
神は病を与へ給ふた 何故々々神は私に斯様なものを与え給ふのか

青い葉がくれにチラ／＼する軒燈の美しさに見とれてゐたやもりが つひに身のみにくさも忘れて電燈に這ひあがつて熱に焼□⁽²²⁾されて みにくい骸を残してゐるのを見ましたが私の私たちアイヌの女はちようど同じやうなことをします。さもないものは世の片隅の薄暗い所にすまつて美しくも尊い御代の光に幻惑されて やもりが白い葉裏をけつて みにくい骸を残すやうにほろびてゆきます

ま と め

幸恵が文字化したユーカラには、重複を避け、むごい戦闘の場面を抑え、野卑に見える言葉も控えたい気持が動いている。聞いている何の妨げにもならないのに、なぜ幸恵はためらつたのか。それには次のような理由が考えられる。
すぐれた書き手だった幸恵は、語るを書くに改めるとき、そのギ

ヤップにとまどつたであろう。また、まだ珍らしかつた女学校の教育を受けたクリスチヤンでもあつた若い十代の女には潔癖感もあつたろう。そして、アイヌよりも和人といわれることが有利だつた當時に、アイヌだなんて思わないと言われたときの心の動搖。それらが錯綜し、渾然一体となつて幸恵のユーカラができあがつた。

謝辞

幸恵メモの見にくいところを大林太良・野村純一の両氏に読んでいただきいた。お礼を申し上げる。

〔注〕

- (1) 知里幸恵『アイヌ神譜集』(一九二三) 東京
- (2) 萩中美枝「幸恵ノートに関する覚え書」『知里幸恵ノート』昭和五十七年度(一九八二) 札幌
- (3) 金田一京助『思い出の人々』(一九六一) 東京
- (4) 切替英雄『アイヌ神譜集』辞典(一九八九) 札幌、これにより一九九〇年、第一八回金田一京助博士記念賞を受賞した。
- (5) 北海道教育庁『知里幸恵ノート』昭和五十六～六十年度(一九八一～一九八五) 札幌
- (6) 知里幸恵遺稿『銀のしづく』(一九八四) 東京
- (7) 藤本英夫『銀のしづく降る』(一九七三) 東京
- (8) 金田一京助『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』(一九三一) 東京

京

(10) 萩中美枝『アイヌの文学ユーカラへの招待』(一九八〇) 札幌

(11) 萩中美枝「アイヌの口承文芸オイナ」『国立民族博物館研究報告別冊』五号(一九八七) 吹田
（12）杉村キナラブツク、大塚一美、三好文夫、杉村京子『キナラブツク・ユーカラ集』(一九六九) 旭川

(13) 金田一京助『筆録訳注『ユーカラ集』VIII』(一九六八) 東京
（14）ポン・フチ『アイヌ語は生きている』(一九七六) 札幌
（15）前掲書『知里幸恵ノート』昭和五十八～六十年度
（16）前掲書『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』

(17) 前掲書『知里幸恵ノート』昭和六十年度
（18）前掲書『知里幸恵ノート』昭和五十六年度

(19) (20) (21) 前掲書『銀のしづく』
（22）殺という字が途中まで記してある。

(はぎなか・みえ)